

新刊紹介

がんというミステリー

宮田親平（日本医学ジャーナリスト協会名誉会長）

発行：文藝春秋/〒102-8008 東京都千代田区紀尾井町 3-23 / 03-3265-1211/A6 判/212
頁/価格 690 円（税別）/ 2005 年 6 月 20 日発行

癌がわが国の死亡原因の首位を独走するようになって以来、二十年以上が過ぎています。本書は週刊文春などの編集長を勤められた宮田親平さんによる、きわめて分かりやすい癌の解説書です。1 世紀以上にわたる癌研究の歴史を記しながら、癌発生の謎解きがされていると共に、がん治療についても平易な解説されています。

癌と微生物とが密接な関係があることは、種々の癌ウイルスの存在からも明らかです。C 型肝炎ウイルスも、肝臓癌の主要な原因になっています。また、2005 年のノーベル医学賞はピロリ菌の研究者であるマーシャルとウォーレンに与えられましたが、ピロリ菌は胃潰瘍の原因になるだけでなく、胃癌の原因にもなるようです。大規模な疫学研究などの結果は、それを強く示唆しています。癌ウイルス研究の歴史の紹介は、本書の主要なテーマの一つです。

本書は以下の 20 節から構成されています。

- 1 . がん発生は局所から
- 2 . 「魔法の弾丸」を求めて
- 3 . 人工がんを作り出す
- 4 . 外科手術の近代化
- 5 . 化学療法のパイオニア
- 6 . 毒ガスから生まれた抗がん剤
- 7 . 新時代を開いた吉田肉腫
- 8 . 抗がん抗生物質の誕生
- 9 . 進みゆく三大療法
- 10 . 免疫療法登場す

- 1 1 . 「免疫監視機構説」をめぐる攻防
- 1 2 . 分子腫瘍学の門を開く
- 1 3 . がんの原因はウイルスか
- 1 4 . 次々と見つかったがんウイルス
- 1 5 . ではウイルスはどこにいる？
- 1 6 . ヒトがん遺伝子を発見せよ
- 1 7 . リンパ球活性化療法から遺伝子治療へ
- 1 8 . がん抑制遺伝子と「多段階発がん説」
- 1 9 . 分子標的薬への道
- 2 0 . ゲノムとセルフケアへの道

なお、巻末には関連年表が載せられています。

本書では山極勝三郎、市川厚一、藤浪鑑、佐々木隆興、吉田富三、梅沢浜夫、杉浦兼松、豊島久真男博士といったわが国の偉大な先達たちも業績が詳しく紹介されています。ミステリー小説を読むような気分で、引き込まれるように読了しました。研究の過程におけるエピソードが紹介されているのも、本書を身近なものにしています。

特に印象に残ったところを紹介しますと、四面楚歌の中で、毎日毎日コールタールをウサギの耳に塗りつけ、ウサギにがんを作った山極・市川の努力には頭が下がりました。毒ガスの研究の過程から抗癌剤の一つが発見されたというのも驚きでした。カナマイシンの発見者である梅沢浜夫博士が、ブレオマイシンを発見された経緯も、私が同じ研究所に在籍していたこともあって、大変に興味を持ちました。

がん分野だけでなく、医学分野全体に関する宮田さんの知識の深さが本書から、うかがうことができます。見出しからもご想像いただけるように、最新の知見も盛りされており、分かりやすく解説されています。免疫学の理解にも役立ちます。大学の講義用の教科書としても使える立派な本です。がんに関心を持つ人たちだけでなく、医学生物学分野に席をおかれる一人でも多くの人に読んでいただきたい本です。

((独) 医薬品医療機器総合機構 三瀬勝利)